

変化述語をもつ「どんだん」文の意味からわかる「動詞固有の意味」と「文の意味」、そしてその関係について

小西 正人

0. はじめに

「変化動詞」のアスペクト的意味を扱った研究はこれまでに数が多い。然しその多くが「2時間」「5分で」というような修飾表現との共起テストによる動詞分類を中心とする研究であり、そういった時間的なアスペクト意味についてはあとから、すなわち文全体の解釈の時点において付与されるものであるという小西(1997)での結論を得たいま、動詞固有の意味とは何かという更なる探究が必要となってくる。本稿では動詞固有の意味を探るため、現代日本語における修飾表現「どんだん」に焦点をあて、変化述語をもつ「どんだん」文がどのような意味の形、事象の形をもつかということについて詳細な観察を行う。そしてその観察を通じて、変化述語文における動詞固有の意味と文の意味との関係について、そして変化述語文以外の文においてもまた、その文と構成素の関係について考えていくひとつの布石としたい。

1. 3種類の意味をもつ「どんだん」文

「どんだん」文は一般に「2時間」などの時間表現と共起することができ、「5分で」などの期間表現と共起することができないので、「どんだん」文によって叙述された事象は Pustejovsky(1991)が述べるところの *process* 類の意味をもつものである、ということが出来る。

- (1) a. 2時間、どんだん食べる。
- b. *5分でどんだん食べる。
- c. *6時にどんだん食べる。

然し以下の例文が示すように、アスペクト的意味が同じ *process* 類の意味であっても、その内実の事象的意味はそれぞれ大きく異なっている。

- (2) どんだん風船がふくらむ。
- (3) どんだん湿布が(端から)はがれる。

(4) どんどんお客人が到着する。

上の例文はすべて process という事象構造を持つ文/命題と考えることができるが、これらの文が叙述するところの「事象」を考えると、事情はそう簡単ではない。

修飾表現「どんどん」は物事の進行をあらわす、などといわれるが、実際何の進行をあらわすのか、詳細に調べた研究はないように思われる。そこでまずこれらの例文の「どんどん」は何の「進行」をあらわしているのか、ということについて、類例を提示しながらこの第1章で見てみることにする。その際参与者については可算的で具体的な個体、述語については物理的な現象を叙述する変化述語を扱う。これは時間的アスペクト意味を process に固定した措置と同様、事象を物理的に観察可能な範囲に固定するためである。

また、「～ていく」「～ている」等のアスペクト補助動詞をはじめとする助動詞のついた形も扱わない。これは、「どんどん」と動詞(或いは述語)との関わりを直接観察することができるようにするためである。

また、すべての「どんどん」文について、「どんどん」が文頭に置かれる例を観察する。これは統語位置による相違が出てこないようにするためである。

それでは例文(2)-(4)の「どんどん」文について、その意味するところを見ていく。

まず(2)はひとつ(もしくは複数でも可)の風船が「どんどん」大きなものになっていくさま、すなわち風船の全体的な変化を叙述しているものである。一般的な事象の形としては、「対象(参与者)xがyになる、然もその「y(になる)」というのは方向性を伴うスケール(尺度)をもった述語であり、その変化進行の程度が「どんどん」により叙述されている(註:もしくはこの事象の形を意味構造の中にふくむ。以下(3)と(4)に関する考察についても同様である。)」という意味をもつと記述することができる。

この意味が確立している例としては、次のような例(5a)が挙げられる。述語の程度部分を取り出す文脈を後につけると、その差が顕れてくる。それぞれの例文において、a.は(2)と、b.は(3)と、そしてc.は(4)と対応する意味をもつ例である。

- (5) a. どんどん太郎が太る。けれどもまだそんなには太ってはいない。
- b. どんどん布が端から赤く染まる。*けれどもまだそんなに赤く染まってはいない。
- c. どんどん捕まる。*けれどもまだ彼はそんなに捕まっていはいない。

それに対して(3)はそうではなく、ひとつ(もしくは複数でも可)の湿布が「どんどん」端からはがれていくさま、湿布の部分的な変化を叙述していると解釈されるものである。この意味での

一般的な事象の形は「対象(参与者)xがあり、そのxの部分・端から連続的に非 $y \rightarrow y$ という変化が進行する、その進行具合が「どンドン」により叙述されている」というものであると考えることができる。

この意味が確立している例としては、次のような例(6b)が挙げられる。参与者の部分性をあらかず文脈を後につけると、その差が顕れてくる。

- (6) a. どンドン(一匹の)熊が彼に近づく。*もう(体の)半分以上が彼に近くなった。
- b. どンドン湿布がはがれる。もう、あと下の端しかくっついていない。
- c. どンドン荷物が届く。*その荷物、下半分はもう届いた。

そして最後の例文(4)について、これはお客人が複数いることを意味し、その到着の状況を叙述している文である。この意味での一般的な事象の形は、「対象(参与者)xがあり、その対象xにおいて非 $y \rightarrow y$ という変化が起こる、その変化を被った対象の数の増加(減少)の進行具合が「どンドン」により叙述されている」というものになる。

この意味が確立している例としては、次のような例(7c)が挙げられる。参与者の複数性を明示する照応表現で受けることができるのは、この解釈のみである。

- (7) a. どンドン地球が汚れる。*それらは顧みられることはない。
- b. どンドン端から氷が割れる。*それらは自然の摂理によって水になる。
- c. どンドン子供が生まれる。彼らはほとんどが大きくなることはない。

それではなぜこのような意味の違いが出てきたのだろうか？

もともと「どンドン」という修飾表現は語彙登録の段階において「(何らかの)進行を叙述或いは修飾する」という意味機能しか持ちあわせていないに違いない。それが、実際に発話された(或いは書かれた)文の中で、他の表現や文脈と共謀しながら、その「文意味」を作成していくのである。例えば出来事 e を修飾する場合、その「文意味」は、まず、「どンドン(e)」という形であらわされる。そして更にその「文意味」がより詳細な解釈を得る必要がある場合に、「進行」の修飾先がそれぞれ決定され、それが程度の進行であったり、部分・範囲の進行であったり、或いは複数の意味をもたらしたり、という形で顕れてくるのである、と考えることができる。

それ故、文脈や共起語句などによっては可能な解釈が制限される場合が出てくる。次の章では、どのような場合に可能な解釈が制限されるのかということについて、見ていくことにする。

2. 「どんだん」文の意味と解釈の制約

2.1 「どんだん」文全体について

「どんだん」が修飾するものはイベント、或いは事態とか事象とかいわれるものでなければならない。それ故、たとえば物の性質をあらわすような文/命題を修飾することはできない。

(8)*どんだん塩分を5%含む。

これは「どんだん」の、「進行をあらわす」という意味の性質上、被修飾部分が何らかの「動き」を示すものでなければならないからである、と説明することができる。

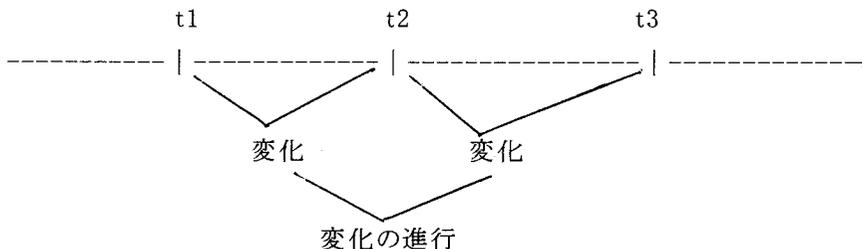
また「どんだん」文は **atelic** である。それ故、終結点を示す表現と共起した場合、意味が制限される。

(9)a.どんだん屋上に上げる。

b.(?)どんだん6mに積む。

いずれも「屋上に上げる」こと、「6mに積む」ことの複数回生起について述べられており、それぞれ「どんだん上げた結果、屋上まで上がった」「どんだん積んだ結果、6mになった」という意味にはならない。

「どんだん」文は、ただ何らかの事態が進行した有様を叙述しているだけでなく、これからもなおその事態が進行していくところまでをその意味視野に収めている。ということは参与者もしくは事態の「変化」のようなものが一度きり起こったものではなく次々と、或いは連続的に起こらなければ「どんだん」で修飾できない、ということである。そのような「変化の進行」を見るためには観察可能な「変化」自体は2つ以上なければならない。そして「変化」が2つ以上あるのであれば、ある時間における「観察」は3つ以上の点でなされていなければならない。以上の点を図示すると、次のようになる。



そのうえ、事態が「進行」していることに必然的に伴うこととして、何らかの蓄積を伴う事態を記述する必要があるようだ。たとえば次の例は、余程の文脈が付されない限り蓄積的意味を推察することができないために、意味をなさない。

(10)*どンドン同じところを読む。

2.2 程度の進行をあらわす「どンドン」文について

「どンドン」文が程度の進行を叙述するためには、「どンドン」を除いたほかの部分に程度(の進行)をあらわしている部分がなければならない。それ故、程度(の進行)をあらわさない事象である場合、典型的には1か0かという値しかもてない述語をもつ事象ではこの「程度の進行」という意味をあらわすことはできない。程度の進行の意味は、事象が方向性を伴うスケールをもつ場合にのみ認められる解釈である。

(11)a.#どンドン使用済になる。

b.#どンドン子供が生まれる。

(11a)の例文において、「使用済になる」というのは使用済であるかないかの二値的な評価を要求する述語である。それゆえ、その「使用済み」度合が進行していく様子を「どンドン」文によって叙述することはできない。それは次の(12)のような比較構文にあらわれることができないという事実からも裏付けられるものである。

(12)*#このリトマス紙は前よりも使用済になった。

また、この意味をもつ「どンドン」文は、同じように程度を修飾する「だんだん」「ますます」を「どンドン」のかわりに入れても叙述を行うことができる。

勿論これらの程度をあらわす部分というのは「動詞」部分に含まれていなくてもよい。例えば、核の述語を修飾する修飾表現を更に「どンドン」で修飾することもできる。

(13)どンドン赤く塗る。

(14)(調子にのって)どンドン高く売る。

例えば(14)では「売る」という事態が「高く」という表現によって修飾を受け、更にその「高さ」がスケールをもつとして、「どンドン」によりその「程度の進行具合」を叙述されているので

ある。特に(14)の「売る」については、その本来的・固有の意味の中にスケールをもっていないので、文脈で補完されない限り次の例文はこの「程度の進行」という解釈をもつことはできず、「複数」の意味で解釈するしかない。

(14')#どンドン売る。

2.3 部分・範囲の進行をあらわす「どンドン」文について

この解釈をもつためには、文の参与者のうち、変化を受ける参与者は填充性(Declerck1979のいうところの extension)をもたなければならない。平たくいうならば、対象は「大きさ」をもたなければならない。点や線、もしくは内部に不均質さを許さないものであってはいけない、ということである。

(15)#どンドンこの点を塗る。

(15)において、対象「この点」は填充性をもたない。よって、本稿でいう「部分・範囲の進行」の意味をあらわすことはできない。

また、述語の性質として参与者の内部に不均質を認める述語であることが必要となる。この反対は参与者の一括的・全体的叙述を行う述語であり、そのような述語をもつ「どンドン」文である場合、参与者は一括変化を行う「点」と同じく、やはりこの「部分・範囲の進行」の意味をあらわすことはできない。

(16)#どンドン太郎が国境を越える。

ここで使われている動詞「越える」は、対象「太郎」が全体として均質的な状態を保つことを要求する述語である。よって、この文は「部分・範囲」の進行の意味には解釈することができない。

(17)#どンドン毫碌する。

これも(16)と同様に、「毫碌する」という述語は参与者の一括的な変化を要求するものであり、この「部分・範囲」の進行という解釈とは相容れない。ここでもまた「述語(動詞)固有の意味」のすがたが「どンドン」を通すことによって明らかになってきているのである。

2.4 複数の意味をもたらす「どんどん」文について

参加者は複数であるので、それを指示する名詞句(或いは相応の)表現が複数の個体を指示できるものでなければならない。たとえば、次の文において参加者は単一の個体を指示することが明言されているので、この文は「複数」の意味解釈を発動できない。

(18) # (ひとつしかない)地球がどんどん汚れる。

また、「どんどん」のかわりに、個体の意味が前面に出る「次々に」という修飾表現に言い換えることができる。複数の参加者という意味をもつことのない他の解釈では、この言い換えはできない。

=====
この解釈をもつことのできる述語の数はこれまでの2つの解釈に比べると非常に多い。それは、これまでの2つの解釈をもつにはいろいろな制約が多かったのに対し、この解釈をもつ場合には述語の制約が緩いからではないか、と考えられる。そこで、これまでの「どんどん」文が要求する述語の性質も一度おさらいすると、次のようになる。

- ・述語はその意味構造のうちに方向性を伴うスケールをもっていなければならない(程度)
- ・述語は対象の変化が部分的であっても叙述可能でなければならない(部分・範囲)
(対象の内部の不均質にも拘わらずそう叙述することができる、ということ)

この条件を考えると、「どんどん」文が可能な動詞のうち、対象(参加者)の一括・全体的参加を要求し、且つそれが段階的でない動詞(或いは述語)というのは、必然的にこの「複数」の意味で解釈されるしかないのである。それはたとえば以下のような動詞である。

勝つ、立つ、生まれる、死ぬ、届く、始まる、終わる、来る、売る、買う、売れる、
寝る、捕まる、見つかる、置く、就職する、解散する、など

これらの動詞には身体保持動詞や人間特有の行為について叙述する動詞が多いのも特徴である。それは身体(の状態)を一括して叙述するのがこれらの動詞の固有の意味であるからである、と思われる。いずれにせよここでも、動詞(或いは述語)固有の意味、というのが「どんどん」を通して鮮明に浮き彫りにされた、ということができるのである。

3. そのほかの「どんだん」文

この章では、前章までの観察結果をもとに、変化述語以外の述語と共にあらわれる「どんだん」と、その文のもつ意味がどのようなものになるのか、或いは語彙としての動詞の意味がどのように使用されているのかということについて考える。

前章で見た通り、「どんだん」の意味機能は、出来事 e に対して進行の意味解釈を付与もしくは修飾するというものであった。物事が進行する、ということは、逆に言えば必然的に何らかの「蓄積」があり、その上に物事が重ねられていく、ということの意味するものである。

それ故、この意味をあらわすことのできる事象であれば、「どんだん」を使って進行/蓄積を修飾することができる。そのひとつの例が、移動動詞である。次の移動動詞を使った「どんだん」文は「対象(参与者)が方向をもった経路の先のほうに位置する、その進行具合が「どんだん」によって叙述されている」という移動事象の意味をあらわすものである。

- (19)a. どんだん進む。
- b. どんだん落ちる。
- c. どんだん転がる。

これらが「どんだん」文である限り、進行/蓄積の意味が必ず必要である。移動事象の場合、それは進んだ距離をあらわす場合が多く、それ故たとえばそのような動作はあるけれども移動がない場合には、これらの「どんだん」文でその状況を叙述することは難しい。

また、幾つかの「どんだん」文の意味の形が確定すると、次はその同じ形を使って新しい意味解釈が意図される場合が出てくる。

- (20) どんだん社会人になる。

通常、社会人であるかないかというのは、定義によって二值的に決定できることである。例えば松村明編(1988)の三省堂『大辞林』での定義には「社会人＝学校や家庭などの保護から自律して、実社会で生活する人」とある。また、「社会人になる」という変化述語は当然参与者の一括的な変化を要求するものである。体の右半分だけ社会人になった、とはいえない。これらの事情から、上の例文は複数の参与者についての叙述であることが期待される。

然しこの変化述語が文脈などの事情により複数参与者の読みが阻止されたとする。次の例文を見てみよう。

(20') どんどん太郎も社会人になるねえ。

この場合、「太郎という名の人が次々に社会人になる」という複数参加者の解釈を引き出さないのであれば、強制的に「程度の進行」の解釈もしくは「部分・範囲の進行」の解釈が呼び出され、二値的で一括変化を要求するはずの変化述語「社会人になる」が含まれる「どんどん」文は、それぞれの解釈の鑄型に押し込められた意味内容をもつに至るのである。たとえば程度の進行の意味の鑄型に押し込められた場合、この文は「どんどん社会人らしくなる」という意味に解釈されることになる。そうではなく、部分・範囲の進行の意味の鑄型に押し込められた場合、この文は例えば「社会人として振舞うべき場が増えていく」或いは「この間はスーツにネクタイ姿だったけれど、今日は七・三分けまでマスターしている」などの意味をもつこととなる。絶対的にそこにあるのは「解釈の型」「事象の型」であり、動詞(句)や参加者はその型に合うように解釈されるのである。但し、このような強制解釈は多くの場合無理やりの解釈であるということと、どの解釈の型で解釈すればいいのか判りにくいということから、そのままの形では容認性に多少の疑問のある文となる場合が多い。

或いは「非変化動詞」によって変件事象の記述を行う場合がある。その場合は「どんどん」文の特徴である「進行」という意味が鑄型のとおりに前面に押し出され、その「どんどん」文は「非変化動詞」を述語(の一部)にもつにも拘わらず、変化/蓄積/進行の意味をもつこととなる。

たとえば日本語において「押す」という動詞は必ずしも変化を含意しない動詞である。ところがこの動詞が「どんどん」文の中に用いられると、途端にこの「どんどん」文は何らかの変化/蓄積/進行をあらわす文となる。

(21)a. どんどん押す。

この例文があらわす意味はいろいろあるが、たとえば「対象(参加者)xがあり、その対象xにおいて非被押→被押という変化が起こる、その変化を被った対象の数の増加の進行具合が「どんどん」により叙述されている」という複数の意味で解釈することもできる(22b)し、移動をあらわす解釈をとることもできる(22c)。

(21)b. どんどんボタンを押す。

c. どんどん台車を押す。

また、「変化動詞」が使われておらず、参加者の複数という読みを導入して事態の進行をあらわすという手段も封じられたとき(たとえば参加者が単数である場合など)、その文は「事態

の複数」という修飾を引き起こすことになる。この「事態の複数」という修飾は、たとえば機会の複数という意味に解釈することができる。勿論この場合には、「何度も～する」というように蓄積の意味をもつことで「どンドン」文を成立させるのである。

- (22) a. どンドン文句を言う。
b. どンドンこの赤ちゃんに触ってください。
c. どンドン遊ぼう。

然しこの解釈は「どンドン」の本質から少し離れている所為か、容認度の低い文が多い。そこで実際の例としては「然々の機会をもつ(ようにする)」という行為記述について用いられる場合が多く、(22b, c)のように命令や勧誘などのモダリティで補われて発話される場合が多い。そしてこの意味をもつ場合、この修飾表現「どンドン」は「どしどし」と言い換えても大きく意味が変わることはない。

或いは(何らかの)行為が行われる時間を修飾して「時間の進行」という読みをもたらす場合もある。

- (23) そのままだンドン自転車をこいでください。

自転車をこいでも進むことはなく、自転車発電などによって何かが蓄積されることのないような場合でも、上の文を発話することはできる。然し、何らかの行為をあらわす場合でないと容認しにくいようである(たとえば「?どンドン待つ」など)。

4. 「どンドン」文の解釈について

最後にいくつか重要なことを述べておきたい。

まずひとつ言えることは、言語表現によってあらわされる事象が同じものになるのであれば、「どンドン」の修飾先の違いがわからない、し、わかる必要もない、ということである。

- (24) どンどんどみを捨てる。

この例文において、適切な補助文脈がない場合、この「どンドン」文があらわしているのは対象「ごみ」の複数であるのか、出来事「ごみ捨て」の複数であるのかを決定することはできない。然し

何らの文脈がない場合、この文はどちらの意味にも特定されていない文として発話に参加するのである。

それと関連して、文は必ずいつも解釈されきるわけではない、ということも言える。すなわち、どの解釈の鋳型で解釈されているのかについて、常に確定される必要はない。

(25) どんどんコンクリートが落ちる。

この例文において、「コンクリート」があらわすものはひとつの全体であり、その端からぼろぼろと落下が起こっているのか(「部分・範囲の進行」)、それとも指示されているものは複数のコンクリート片であり、その落下現象が複数の個体において実現し進行しているのか(「複数」)について、対話の場面において常に明確にされる必要はない。凡そ「コンクリートの落下が進行している」ということがわかり、それで十分な場合、それ以上その文について穿鑿されることはない。

そしてもうひとつ、文についてのこれらの解釈は必ずいつも「生成」されるわけではない、ということも言えると思う。これは、「どんどん」文が与えられる度に「どんどん(e)」という式を作り出し、その後、どの部分に進行の意味がかかるのかを探し出し、数ある候補の中からその中で最も適当な解釈を決定する、という作業が毎度毎度行われているのではない、ということである。そのような作業が毎回毎回行われていては、円滑なコミュニケーションは行えないのではないかとと思われる。恐らく、解釈のコストを下げるもうひとつの方法として、格言のようにかなりの数の「文」や「句」が心的辞書に登録されている、或いは名詞(句)や動詞と特定の解釈の型との結びつきが緊密なものになっている、と考えることができる。それ故「現実の状況でよりあられやすい」解釈のほうが優先され、他の可能な解釈が候補にももたらなかったりするため、同じ統語構造をもっているでも違った解釈のほうが優先されたりすることになるのである。

5. まとめ

変化述語をもつ「どんどん」文についての本稿での主張をまとめる。

・変化述語をもつ「どんどん」文には次の3つの種類の意味がある。

1. 「程度」の進行をあらわす
2. 「部分・範囲」の進行をあらわす
3. 「複数」をあらわす

・変化述語にはいくつかの種類がある。

1. 内部にスケールを備えた方向性をもつ述語

この反対 = 値がデジタルな述語

2. 部分の不均質を認める述語

この反対 = 参加者の一括的・全体的叙述を行う述語

3. まったく進行の意味をあらわさない述語

また、それぞれの場合に観察される制限や項の特徴などは、本文で記した。

そして、それぞれの「どンドン」文に解釈されやすい動詞を挙げておく。

1. 「程度」の進行の意味：

枯れる、乾く、崩れる、冷える、広がる、腐る、太る、しぼむ、澄む、曲がる、腫れる、
ほどける、酔う、離れる、上がる、近づく、混ざる、など

2. 「部分・範囲」の進行の意味：

裂ける、塞がる、千切れる、かぶさる、出る、破れる、割れる、埋まる、塗る、はずれ
る、削る、重なる、など

3. 「複数」をあらわす意味：

勝つ、立つ、生まれる、死ぬ、届く、見つかる、つかまる、始まる、来る、買う、授け
る、渡す、ぶつかる、就職する、解散する、など

参考文献

Declerck, Renaat 1979 “Aspect and the bounded/unbounded (telic/atelic) distinction,” *Linguistics* 17, 761-794. The Hague; Mouton Publishers.

小西 正人 1997 「動詞固有の意味とアスペクト的意味－或いは現代日本語の「変化動詞」のアスペクト的意味の正しい取り扱い方－」、『言語学研究』第 16 号、175-210、京都大学言語学研究会。

Pustejovsky, James 1991 “The syntax of event structure,” in B. Levin and S. Pinker (eds.), *Lexical & Conceptual Semantics*, 47-81. Cambridge, MA; Blackwell Publishers.

(こにし まさと、博士後期課程)

Japanese Adverbial “Dondon” and Change-predicates Generate Various Event Interpretations – About its Limitations and Generativities –

KONISHI, Masato

Émile Benveniste once said, “le sens d’une phrase est autre chose que le sens des mots qui la composent” (“La forme et le sens dans le langage”, 1966). This paper is an attempt to clarify and explain the relation between sentences, words, and “signes (termes)”.

In Japanese, “dondon”-sentences with change-predicates show three patterns of meaning:

- (a) Dondon huusen ga hukuramu.
- (b) Dondon posutaa ga hagareru.
- (c) Dondon okyaku ga tootyaku suru.

In example (a), the sentence with “dondon” describes the process of the expansion of a balloon. Sentence (b) describes the situation in which the “coming-off” of a poster proceeds from its edge, and sentence (c) describes the process in which the number of the guests grows in the course of time.

These three patterns of meaning must have come about from the concatenation of the consisting elements. In (a), “dondon” conspires with a predicate of scale and generates the meaning that the degree of the size of a balloon gets bigger. In (b), it conspires with an object that has an extension and generates the meaning that this “coming-off” proceeds from the edge. In (c), it conspires both with a predicate that has no scale and with an object that has no extension, and generates the meaning of cumulation.

Therefore, predicates and objects (or participants) constrain the interpretations of “dondon”-sentences, and I must add that these properties (with scales or extensions) are not derived from each individual word, but from the event structures of these sentences.

What we actually have here are patterns or types of the interpretation of events, so sentences (or utterances) are interpreted along these lines. Words or elements contribute to generation but not construction of the meaning or interpretation of sentences.